



山七又半一

第一一年一號

山とキス



第一年

山とキスの會

春の槍から歸つて

板 倉 勝 宣

白馬、常念、蝶の眞白山々を背負つた穂高村にも春は一ばいにやつて來た。あんづの花が目覺める様に咲いた百姓屋の背景に、白馬岳の姿が薄雲の中に、高くそびえて、雪が日に輝ひて谷の陰影が胸のすく程氣持よく拜める。乾いた田圃には、鶏の一群が餌をあさつて居る。水車の音ミ糶をひく臼の音が春の空氣にとざされて、平和な氣分がいたる所に漲つて居た。

一步を踏みだして烏川の谷に入ると、もう雪が出てくるしかし岩はぜの花の香が鼻をつき駒鳥の聲をきくミ、この雪も、今にも、とけて行きそつに思ふ。しかしやがて常念の急な谷を登つて乗越に出ると、もう春の氣持は、遠く去つて仕舞ふ。雪の上に頭だけだした、偃松の上を渡つて行くミ、小舎の屋根が、やつと雪の上に出てゐる。夕日は、槍の後に沈まうとして、穂高の雪が一寸光る。寒い風が吹いてきて焚木をきる手がこぼえて來る。軒から小舎に、這ひ込んで雪の穴に、火を焚きながら、吹雪の一夜を明すと

春は、全く、かけをひそめた。槍澤の小舎の屋根に八尺の雪を計り槍澤の恐ろしい雪崩の跡を歩いて槍のピークへ、ロープとアックスミアイスクリーパーでかぢりついた時には春なのか夏なのか、さつぱり分らなくなつた。けれども再び上高地に下りて行くと、柳が芽をふいて、鶯の聲がのびかにひびいて來た。温泉に入つて、雪から起き上つた熊笹ミ流に泳ぐ、イワナを見た時に、再び春にあつた心地がした。春の山は、雪が頑張つては居るけれど、下から命に溢れた力が、うごめいて居るのが解る。到る所に、力がみちて居る。空氣は澄んで、山は見え過ぎる程明かに眺める事が出来る。夏の山より人くさくないのが何よりすきだ。これから、あの邊の春の山歩きに付いて氣の付いた事を書いて見る。

先づ槍のピークに就いて云はねばならない。槍澤の雪崩は想像以上に恐ろしい。さうしても雪崩の前に行かねば危険でもあるし時間も損をする。小舎から槍の肩まで、唯一

面の大きなスロープである。急な所々には緩な所は出てくるけれど、坊主小舎も殺生小舎も大体的見當はついてもはつきりとは解らない。唯雪の坂なのだから。小舎から坊主と覺しき邊まで、カンヂキで二時間半さ見ればいゝ。スキーでも略同じではあるが雪の様子で、この時間はちがつて来る。時間を氣にしないのなら肩までスキーで登る事が出来る。但し一尺許積つた雪の下は氷なのだから上の雪が雪崩れたら、アイスクリーパーの外は役にたゝないが、それは恐らく四月末の事であらう。

坊主の邊から肩までは、ひさく急な雪の壁で三方をめぐらされて居る。眺めて居ると、とても登れそうにも思はれない。しかし登りだすに、どうにか登れて来る。肩に上ると雪は、急に硬くなる。そして今迄大丈夫樂に登れると思つた、槍の穂が、水で、とちられて居る事が解つて来る。試みにアックスでステツプをきると金の様な氷が飛ぶ。勿論其上に二寸位の新雪があつた。どうしてもこれからは、ロープミアックスミクリーパーものである。これが氷許りなら大いに樂なのであるが、岩が所々に頭を出して居るのでステツプが切りにくい。岩と氷のコンクリートである。五分をき位に、頂上の邊から氷と岩が落ちて来る。これは、温度によるのであらうから好天氣の日は、多いと思ふ。肩から非常に時間を要する。私は、小槍の標高より少し上まで行つたがそれで考へると、登り二時間は大丈夫かゝると

思ふ。肩から上下五時間をとつて置く必要がある。各自がアックスをもつて居なくてはいけない。アイスクリーパーは外國製のものでなければ、安心は出来ない。夏の雪谿に用ふるものなら無い方がよからう。金の様な氷に、足駄をはいて歩く様なものだ。下るのに、時間も掛るがロープを使用しなくてはならない。今年ももう肩に下りる所で一人滑つたが幸に、杖で、留つた。岩と氷と雪の好きな人は、相當に面白いクライミングが出来るが、命は、保證出来ない。

肩から小舎までは、スキーなれば、二十分をとつて置けば大丈夫である。しかしこれは、ころぶ時間に入つて居ない。カンヂキで一時間位であらう。

これから以下氣付いた事を書いて置く。
雪崩。一昨年ほ三月二十日頃から入つたが少しも雪崩て居なかつた。今年ほ約廿日遅れて入つて見たら、總ての谷が雪崩れた後であつた。年によつて違ふであらうが、三月中に入る方が安全である。グルンドラウイーネに會つたら一溜もない。そして雪崩の期節に入るに荒れた翌日の好天氣は危険であるし、雨降りの翌日の好天氣も又雪崩れる。それにこの時は、カンヂキがもぐつて人夫を連れて居る時は、歩けない事がある。だから、さうしても雪崩前に山へ行かなければ損である。

人夫。我等の背負ふ荷には限がある。だから人の全くな



楢の肩より穂高を望む

い山の中を一週間も歩くには、人夫を頼む外に仕方がない所が人夫は、カンヂキであるからスキーミなかノ、歩調が一致しない。確かに不便であるが我等が弱くて、荷が背負へないのだからこの不便は思ねばならない。人夫は必ず獵師でなければならぬ。夏山を歩いた男等は、却つて迷惑である。山によつては、カンヂキの道ミスキーのとるべき道とは一致しないが、信州の山の様に谷の外登れない所ならば、どうも仕方がない。人夫を連れて居れば夜營は、そんなに早く着かないでも間に會ふ。木をきんどんきつて貰つて、我等は、寢床の用意と飯の用意をすればいい。だから山男ばかりでない時には、人夫が二人は入要になる。仕事に掛る前にパンを一かぢりしないと仕事は早く行かない。いつでも餘分のパンを、もつて居ねばいけない。全く雪の中で宿る時には、人夫が居ないミ、なかなか一晚の焚火がとれない。腹がへり、身体が參つて、おまけに寒くなつて来るミ、仕事は、はかみらない。だから人夫なしで歩きたひのは、理想であるが、今の日本の雪中登山の程度では、やはり必要なのであらう。

スキーミカンヂキ。あの邊の山は、谷を眞直に登らねばならぬ所が出て来るから、スキーのみでは困難である。一昨年は常念の谷をスキーで登つて一時間半もかゝつたが、今年、カンヂキに穿きかへて一時間で登つた。大部分スキーが樂で速いけれど、この山では時にさうしてもカンヂ

キの方が早い所は直ちに、はきかへるがいゝ。他の山でもカンデキは、携帯せねばならぬと思ふ。スキーが破損した時、負傷者のある時に必要である。スキーの靴でカンデキをつけると、ぬけ易いが、大して困難もしなかつた。私はスキーと共にカンデキを携帯する事を絶対に必要とする。

夜營。油紙の厚いのと、シャベルと毛皮(カモシカ又はトナカイ)の寝袋があればいゝと思はれる。何しろ一にも毛皮、二にも毛皮、三にも毛皮である。あとは身体を適應させる外仕方がない。植物質のものを何枚着たつて防寒にはならない。夏見た小舎は必ずしも當にならない。場所に依り小舎により全く雪の爲に使用できない。常念の小舎は偶然に、穴があつたから入れたが、風の吹まわしで、入れない事もあらう。獵師の入る小舎なら大丈夫である。四月なら吹雪さへしなければ。攝氏の零下六度位で、大して下りはしない。小舎なら零度か一度位で樂に、ねられる。雪が餘り積つた小舎で焚火をすると、つぶれる恐がある。

吹雪。三月四月でも吹雪は中々多い。一週間位つゞく事もある。吹雪に至つては、冬に變りはない。雨でも混じょうものなら冬よりも尙悪い。今年は常念の乗越で一日やられた。この吹雪の爲に、槍の肩で小鳥の群が岩に、ぶつけられて雪の上に、澤山、斃れて居た。一昨年も一日やられて、臆からつらゝを下けたり、一寸ぬいだスキーの金具が凍つて靴が入らなくなつたり、大分いちめられた。しかし

其時の雪のよかつた事は、話にならない。話をきくと二月の上高地は、素敵な粉雪らしい。黒部の上流は温氣のあるベト雪だと聞いたから、あつちへ行くなら其覺悟がいる。吹雪の恐ろしさは、會つて見ねば分らない。

大体氣のついた所はこの位である。尙アルペンストックをスキーの杖とする事は、さうしても危険であるから、金の部を取はず様にするか或は滑降には、用ひない様にせねばならない。それから人夫の中に雪の山を歩かないものが來る時は、手袋其他の注意をせねばならぬ。色眼鏡も餘分にもつて行き、万事に注意しないと一人の故障の爲に思はぬ事が出来る。獵師なら大丈夫であるが、金カンデキ等を、わざと持つて行かずに危険な所をさける事もあるから、頂上を極めようとする際には、それも檢める必要がある。靴はネイルドされたものがいゝ様だ。自分は大變幼稚な記事を書いた。早くあの邊の雪中の登山が進歩して、こんな記事がふみにぢられるといゝ。



嶺 山 中

宗谷のモイマ山

竹 内 亮

北海道本島の最北端、樺太の西能登呂岬を間近かに望む宗谷岬附近の地形は、頂面の平坦な低丘で、その突端は西に約十二軒を距てたノツシヤブ岬と共に、美しい段丘のスクロープが砂濱に及んで、平調な汀線に白波を寄せて居るの、他の重要な突角の高山直ちに断崖を以て海に落ちる景觀に比して、眞に驚異に値するものがあるのみならず、その丘地が未だ哺乳動物の曙光さへ見られなかつた白亜紀の水成岩に構成されて居るといふことも、他の半島部から明瞭過ぎる白線を引かれてゐる。

此邊のあのゆるやかな弧面をなした丘の頂面を見ては、地貌の老ひ果てた末路を想像すると共に、西に間近く雄々しい尖頭を雲表にもたけた、利尻山の若々しい峯の姿に今更ながらあこがれを持つ。

吾々は標式的準平原の型を——あの世界の屋根であるバミルの高臺を——想像するには餘りに認識の貧弱さを自覺するが、この平坦に近く削磨された丘陵の連續を見ては、

幾分其の型に近い或る小さな想像は得られる。

こんな地貌にあつては偶々小さな岩塊一つの、否土くれ一つの隆起さへ、非常な注意を引くに充分な對象であるが吾々が宗谷岬附近の丘陵を形成する、云ひ得れば宗谷半島には三つの顯著な峯が、北方の最高の帝王座である利尻山と共に、山好きな旅行者を引きつけずには措かない。

その三つの峯はいづれも同名なモイマ山と云はれて、殆んご等邊三角形の角點に位置して、いづれも圓錐形或は洋鐘形に峯をもたけて、四邊の丘地に對してゐる。

人々の山に愛を持つ眼は、利尻山を見つめると同じ力をこの三つのまぎれもないスリー、シスターズ、ヒルにそよぐだらう。

この三つのモイマ山を便宜のため位置に従つて次の様に名付け度い。

- 一、増幌モイマ山 二五二米

二、時前モイマ山 一二五米
三、尻臼モイマ山 一八五米

増幌モイマ山は三山の中で最も高く、標高二五一米に達し増幌川口から約四軒にある、その支流イチナンナイを更に約八軒を上つた邊にあつて、稚内、聲間方面からは極めて明瞭な峯であるが、その反対側であるオコックの海岸からでは、所謂宗谷山脈の中心を西に約四軒外れて居ると其の山陵がこの頂ミ伯仲の高度にあるために望むこゝが出来ない。

私は此の頂に二度登つた。非常に笹の深い傾斜の急な峯で、その西側に北海道廳で作つた、測量の刈拂があるのを辿つて登ることが出来るが、冬は積雪を利用して、任意の路線を見出すと出来る。

頂は急に四方に降下して、その最高點には道廳の二等三角點の粗末な櫓が立つて居る。

頂の東北側は偃松の密生地、西北側は僅々二米内外にしか生長しない、シナノキの純林で、南側は笹許りの三〇度以上の急斜で、一氣に七・八〇米をイチナンナイに下つてゐる。

眺望は約二七〇度に及び、北東の一部を除いては、西は稚内より利尻、禮文の姉妹島を、南は遠く頓別の山嶽を、北は樺太を望むことが出来る。又よく注意すれば、東の山

脈の低處に、時前モイマ山を見ることが出来る。

この山に登るにはイチナンナイの最奥の民家（増幌川口から約一〇軒）から、イチナンナイ川を更に二軒乃至四軒を上つて山麓に達し、山頂へは一時間未滿で達するこゝが出来た。この邊の高所の植物景觀を概観するには、大變都合のいゝ峯であるが、強て登山をお勧めする程の山でもない。

時前モイマ山は三山中の一番低い峯で、字時前の部落から約一軒北西にあつて、時前から望む頂は家屋形に見ゆるけれど、北東に廻れば圓錐形になつて見ゆる。

全山針潤混雑林に覆はれて、樹下は笹が密生してゐて、樹間から頂上の三角點の櫓が望まれる。この山は標高も低いし、左程登り度いと思ふ程の山でなかつたので、登つても見なかつたが、海岸を旅行してゐると、可成執念深く目に立つ峯である。

尻臼モイマはその標高は僅々一八五米に過ぎないけれど宗谷岬の突端附近にその水際立つて整正な洋鐘形を、周囲の一〇〇米未滿の平な丘上に乗せてゐるので、最も人目を引く。

この山には今年の四月尻臼から登つた。平な丘を約四軒笹の中の残雪を辿りながら進んで山麓に達し、直ぐ頂上に立つて、下りは又笹の中を往路よりすつと南の泊内方面にとつた。

山麓の丘面から峯の七合目邊迄樹木が疎生してゐるが、
いづれも焼木の原で、針葉樹の幹が白くほく笹原に曝され
て立つてゐる。

山頂は緩かな弧状で北東に偏して、陸地測量部の三等三
角點があつて、その櫓も完全である。頂面はチシマザ、が
短く密生して處々に野谷坊主の様な小さな隆起があつて、
そこにはスギゴケやエゾオホバコやウシノケグサ等が生
てゐて、一種特徴のある景觀を呈し、三角點の北東部の上

のスロープは直接荒い海風を受けるためか、山骨が露出し
て、片狀の岩片が密生してゐて笹も生えて居なかつた。丁
度登つた日は荒れ模様で、宗谷岬の平な丘面を一望に收め
得たのミ、時前モイマ山を南に近く望んだ丈で、大いに期
待した三六〇度の眺望は全く失望だつた。
この峰はこの三山の内最も整正な姿を持ち、最も孤立し
最も廣い眺望を持ち、最も人目を引く峰で、二三時間の寄
道をしても失望する山ではない。
(一〇・五稿)

登山用天幕の形に就いて

六 鹿 一 彦

登山用天幕には大体屋根形と、圓錐形又は角錐形との二
大別が出来る。實用的の價値から云へば、屋根形が遙に圓
錐形等よりも優れて居ると思ふ。收容人數に對する天幕の
重量天幕内の容積及び座席の形、幕營地の所要面積、設置
及び撤廢の簡易、附屬具の多少、風に對する抵抗力、及び
價格の點に於て考察するに、何れの點に於ても屋根形の

天幕が優秀である事を否む事が出来ない。だから登山用の
天幕としての實用的價値から見れば、角錐形の天幕などは
全く問題にならぬ。けれど、登山ミ云ふものの意義如何、
即ち登山の目的如何によつては強ち單なる實用的價値のみ
から判斷する事が出来なくなつて來る。
山に登るのに測量家や採集家の様な目的を以てする時、

或はヒマラヤのエヴェレストへでも登ると云ふ時ならば、
最安全に輕便に且つ簡單に目的を達する様に、一切の計劃
を建てねばならぬから、天幕の様な重要なものも、之に適
した形を探る爲に、屋根形をせねばなるまいが、我々の様
な登山其物を樂むに云ふ立場から云ふに少し趣が變つて來
る。實際ヒマラヤ方面の權威者である Workman 夫妻が

Hispar pass を越した時の寫眞を見て Mumm 氏の

Kashmir 方面の山岳旅行の寫眞でも或は Canadian

Rocky の人跡未到地を測量するのを目的とした Palmer

氏の寫眞を見ても、皆屋根形の天幕を使つて居て、日本ア
ルプス邊で見る、八角錐の天幕なんかは見られない。

けれど我々の登山の行程に於ての總ての事物を觀照し享
樂するのが目的であつて、當今流行の言葉で云へば、登山
に依つて人生を藝術化し様として居るのである。だから山
岳の中に人間が入り込んで、山岳の有する特殊の味ひを
破壊しない程度に留めて、人間が入つたが爲に却つて或る
一種の落ちついた、懐しみのある氣分を山岳の示す有らぬ
景觀の中に添加し様とするのである。自然と人間とが渾
然相融して快い調和と美とを新しく創り出して、其の中
に人生の悅樂を見出し度いと云ふのだから、苟も此のハー
モニーを害する様な事物は極力之を排斥したいのである。
勿論調和とか美とか云ふものは客觀のものではない、從
つて如何なるものが排斥せられ、如何なる程度までが拒絶

せられるかは時と所と人によつて異なるものである。だか
ら或る人は林道の開けるのを攻撃し、或る人は山中の小屋
に反對の叫を擧げる。しかし之も林道の開鑿場所により小
屋の建設地により、又其の方法によつて或は之が山岳美の
本然のものを破壊し、或は益々山岳の美を發揮せしめると
共に新しい美的價値を添加する事ともなるのである。

大分餘論に走つたが、天幕の形も成る可く我々の目的に
する登山に於ける有ゆる事物を觀照享樂するのに妨害にな
らぬもの、否寧ろ之を助長するものであらしめ度いと云ふ
觀點から眺めると、斯の八角錐形天幕の價値が認識せられ
得るのである。眞白の八角錐形天幕が布に少しのゆるみも
なく、ピンと張られて居るのは、決して四圍の環境の調和を
害するものではない。却つて新しい、しかも非常に懐しさと
と親しみさを添へるものである。高原に張られた時は、な
だらかな曲線のみの景色に、ピンと立つて急激に傾いた圓
錐の直線が一點の補強物となり、特にクツキリと浮き立つ
白色によつて、強い力を添へる爲、總べてが纏り、締つて
來る。之は特に茫漠として散漫な感じに流れ易い高原に於
て氣附く事であつて、繪畫の中心を形成するものである。
然るに屋根形の天幕では遠望して長方形に見える爲、此の
補強力が非常に減ぜられる。否、寧ろあまりに單純な幾何
學的の形体が、視點を亂して全体の調和を破る恐がある。
又奇峯峻嶺の聳立する大山脈を背景として張られた時には

ピラミッド形の天幕は此の山脈が空際に現はす曲線中に融け込んでしまつて、一の偉大なる山頂として其のスカイラインを引き立たすものである。けれど屋根形の物ではそうは行かぬ。水平線を以てスカイラインを中絶せしめる爲に、非常な混亂を生じて来る。水平線の美的價値は其の長大なる點にある、視角の十分に廣い處が雄大さか、荒涼とか、開濶さか云ふ感じを興へるのであるが、波折曲線の配置が次第に其の極致に達し様とする時、短い平凡な水平線に打ち切られては、全く其の美を失つてしまふ。此んな水平線には何等の美的觀念をも起さしむる力がない。

傾斜線の美ミ云ふものは我々登山者の眼には異常な感興

を興へるものである。山其物が既に總べて傾斜線の綜合物である、ラスキンの云つた落体曲線、沖積曲線、逃走曲線急坂曲線によつて形成せられる山岳美と云ふものは傾斜線美である。従つて其の中に入つて最調和を得易ものは傾斜線でなければならぬ。其他の成形美的要素は餘程巧なる配置をとらねば、ゴシックの殿堂へセツションの裝飾を施した様な不調和を生じるであらう。だから山岳の中に一の藝術品を作る爲に用ふる天幕も此の傾斜線のみより成る八角錐形の物を使ふのが無難であらふと思はれる。

此の意義に於て我々が登山に使用する天幕は、屋根形の物を排して圓錐形又は角錐形の物を賞揚するのである。



アシユペツ岳登山記

松川五郎

夕張山脈中の一支峰、富良野原野の南方銅路線山部驛より至る

僕たちが初めて、アシユペツに出かけたのは、大正九年

三月下旬であつて、しかもその第一回は、失敗に歸した。

それは當時陸地測量部五万山部圖幅が手に入らなかつたので、土地の人から冬には不適當な夏の道を冬も可能だとして教へられたのを守つた爲め、その道の性質上非常に長い間クリーバーを用ひた爲めであつた。その時教へられた道を今五万の山部から圖幅に就いて見るに山部村を發し十九線を西に進みユウフレ澤をのほり夫婦岩を右に廻り山部からホルンに向つて右につゞく尾根にのりつき頂上に到ると云ふ簡單な道であつた。なほ土地の人の話ではユウフレ澤は大部分未だ雪に埋つてゐるだらうと云ふのであつた。その日は天氣もよく早朝に出かけた。埋まつてゐるつものユウフレ澤は夫婦岩の下へゆくまで雪は落ちてゐて兩岸及び川の中の岩を忙しく渡り散らして非常な時間と努力を費さねばならなかつた。十時半頃尾根にとりつき非常によろこんで頂上に向つた。ところが驚ろいた、ここにはどうしても越へなければならぬ大きなギャップがあつたのである。即ち第二の峯に取りつく崖がそれである。時に十二時二十分、一同は穿き慣れないクリーバーを既に五時間近くも使つて苦しい澤のほりをやつて相當疲れてゐたのでそれから約七〇米に近い前面の崖とホルンの急斜面とをよごのほつて頂上をきわめると云ふ事だけでも容易ではなかつた。それに歸路はスキーでない爲めと、澤がある爲めに殆ど往路と同じ位の時間を要するのでそこから引きかへし再擧を企てるより外に道はなかつた。然し忘れ難いのはあ

の尾根からの眺めであつた、北東の方を見れば前々日登つた十勝岳をはぢめオプタテシケの連山、大雪山塊が晴れ渡つた緑の空に白く輝き直ぐ前には岩ミ岩との間を雪につままれたアシユベツのホルンが右肩に純白の鷲が翼をひろげた様な第二の峰を從へて威脅的に聳え立つてゐた。その姿の余り雄大なのに失望の言葉をもらす前に呆然として「いゝな」云つて動かなかつた位であつた。

山部の地圖は去年の道が冬の道としていかにも不適當であつた事を明かにしめした。それで今年には全く反對に山部から見てホルンから左に續く方の尾根に取りつきホルンに出やうと云ふ事になつた。

今年山部へ出たのは可成り長い大雪山の旅を終へての歸途で札幌あたりでは平地に雪を見ない四月の一日(去年よりは二三日をそく)であつた。翌二日は曇り勝で風も可成り強かつた。しかし山もよく見えて今年こそ成功しやうと云ふ氣があるので緊張した。五時十五分出發。

第二十五線を入りスキーを穿く。二十五線のつきあたり尾根即ち山部川上流の右岸の可成り急な針閣混淆の茂つた屋根を登る。

九時一〇八八米と云ふ今日行く尾根の一ツの峯に出る。小憩の後出發ししばらくして白樺の純林となり左にすばらしいポントナシベツの深谷をへだててアシユベツから眞南に鉢盛山につゞく實に美しい山々を望むこゝが出来た。昨夜

からの南風でひきく悪い雪となり、さう云ふ譯かこう云ふ時によく見る、あの表面だけを覆ふ茶色の雪をいたるところに牛のまだらの様に見た。

重い雪、強南風、急斜面—今にも崩雪でもやはりはしないかと云ふ氣を起さずにはゐられなかつた。尾根をすゝむにつれて木がすくなくなり、風は益々強くポイントナシベツの谷から吹き上げてキツクターンをする人のスキーをもてあそんで危く人を倒さうとした。

十時、谷一ツへだてゝすぐ前にアシユベツのホルンは現はれた。食事を取り、スキーをぬぎクリーパーをはき、スキーは白樺の幹にしぼりつけ赤旗をつけて置いて頂上に向つた。もうそこからは白樺もほとんどなく、すこし上ると偃松が岩かけにちよこちよこあらはれてゐた。

十一時ホルンの東斜面の基部に着いたそこからは猛烈な谷をへだてゝ去年ひきかへした峰を見る事も出来感慨深かつた。

一行五名はすでに四本のロープを以て一線につながら先頭は一步步ステップを切りつゝ南に向て東斜面を横切りそのつきたところの稜を強風と戦つて越え西南の斜面に移り北に向つて進む。今は眞横から風を受けてその壓力の強いのと斜面の急で非常にかたかりがりに凍つてゐるのとでそこを横切るには尠からざる苦心をした。三角臺の直下に至り先頭は三角臺に向つて眞直にステップを切り始めた。

削られた氷の様な雪は強風の爲めにことごとく吹きあけられて峰を越れて飛散する。七ツのステップは見事に切られて先頭は三角臺にかざりつく。その時のうれしさは今現はす事はむすかしい。一本の人間の珠数は動いて後から後から三角臺にかざりつき感激にしたつた。かくしてアシユベツ岳(標高一七二六、九米)はきわめられた。

風は雪をまわけて顔面の痛い事でもたまらず直ちに歸路つく。スキーを置いた邊からは雪は極度に悪くなりスキーはビチヨビチヨに濡れて着くのは通り越してあやしく滑つた。こんな不愉快な雪は始めての経験である。無事山部に歸りついたのは五時。此の行を終へたのは何よりもうれしかつた。

此度頂上近くでかくも硬い雪にぶつかり風の強かつた爲めにクリーパーミアルペンロープミアルペンストックを非常に有効に使ひ得て非常によい経験をした。

日が長く、可成り上までスキーを用ひ、雪の硬化するころでクリーパーと穿きかへ頂上をきわめると云ふのは春の登山の最も得意なところであらうと思ふ。これに露營法をうまく應用する事が出来たならば一段の進歩と興味を増す事であらう。

× × × × × × × ×

氷河

全般運動用具
スキー製作販賣

小谷運動具店

札幌・南一・西五

六月號 四十 錢

『父と子』の思ひ出
南(ツルゲーネフ) 大橋純
救はれたる友(創作) 仲政路
流水 沖一
雨舎の話(創作) 須賀爾
田舎の町(創作) 須賀爾
霧の町(創作) 須賀爾
故郷の家(短歌) 是らもとを
シイプラス樹(表紙)……フアン、ゴツホ

札幌北區拾壹條西二丁目二番地
凍影社出版部

二圈 谷

×可なり前から屢話題に上つて居たのであるが、さうとう吾々の手で雑誌を出す事になつた。さて實現し様とする種々面倒な事が出て来てうまく行かない。
×初めからこんな事を云ふのはどうんと思ふが、誌價が比較的低廉なのがあるから購讀者は、此の點に注意して誌代の拂込を眞面目にやつてもらひた。山男は特に金にうといから殊更此れだけ申上げて置く。
×忽卒の間に編輯、印刷をやつたので不満が尠くない。次號は此よりすつこいものが出来るを確信して頂き度。
×第二號には並河功氏の興味ある記事をお載せす。淺田武雄氏からも原稿を頂きました。
×並河功氏は山黨の連中を率ひて五月廿日樽前山に登られた。何しろ樽前の主。竹内亮氏が案内せられたので大變面白かつたさうです。一行は登別で小熊樺、武田久吉氏と落合つて次の日にカルミスへ行がれました。オロフレ岳、登別岳を見て大それた考を抱いた人もあります。
×奥村、南波、青山の三君は定山溪の奥、天狗岳の嶮に登りました。蒼空の五月の陽を見てはたまらなくなつて、ふらふらと飛び出した連中は可成方々を歩きまわられた様です。
×武田久吉氏は近い日曜に、支笏湖のフーテン岳に登られたさうです。残雪を追ふて高嶺の花を訪ふ時期になりました。もう夏の大旅行の計畫があちこちで發表せられ初めです。
(加納生)

大正拾年六月四日印刷
同 六月七日發行

毎月二回發行

一ヶ月定價金貳拾錢

編輯者 板橋敬一
印刷所 加納一
發行所 札幌印刷株式會社
山とスキーの會

目次

記事

春の槍から歸つて……………板倉勝宣(一)

宗谷のモイマ山……………竹内亮(六)

登山用天幕の形に就て……………六鹿一彦(九)

アシュベツ岳登山記……………松川五郎(二)

園谷……………

寫眞

白樺の森(後志國小澤附近)……………中野誠一(扉)

槍の肩より穂高を望む……………板倉勝宣(三)

中山峠……………中野誠一(五)

十勝岳頂上……………中野誠一(一〇)

此の雜誌は山岳、スキー、旅行に興味を持たるる人々の有効な機關雜誌としたい考であります。それらの人々は各方面に亘つて今日迄色々な事をやつて居られたでせうが、その間にあまり連絡が無かつた爲め、お互に諍からぬ損失をして居たと思ひます。勿論吾々の様な微力な者では充分な事は出来ませんが、廣く各方面の人々が此の雜誌に好意を持ち力を添けて下さつたならば、同趣味者として相互に被る便益は淺からぬものと考へます。なるべく敏活に此の目的を達する爲に發刊の回数と比較的多くしました。山岳、スキー、旅行に關することなれば何事によらず此の雜誌を利用せられん事を祈ります。

- × 各方面から續々御投稿せられん事を望みます
- × 紀行文、意見、研究、其他何種のものでも原稿は全て一行二十二字詰、行を改むる時は一字下ける事。
- × 寫眞は印畫一枚を送つて下さい。題名、撮影者其他その寫眞に關することをなるべく詳細に書添えて下さい。
- × 又各地狀況の通信は一片の葉書でもお知らせ下さい。
- × 原稿の取捨は編輯者にお任せ下さい。投稿に關しては出来るだけ御相談に應じたいと思ひます